Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 3

わが国における保育環境の歴史的変遷について
4．鉄棒

○田代和美（お茶の水女子大学）　中島寿子（聖ケ丘教育福祉専門学校）　内藤知美（お茶の水女子大学大学院）　柴崎正行（東京家政大学）

はじめに

現在、ほとんどの幼稚園や保育所に設置されている鉄棒は、一体幼児にとってどのような遊具なのだろうか。それを知るための手がかりとして、鉄棒がどのような経過を経てわが国の幼稚園に広く設置されるようになっていったのかを検討することを本研究の目的とする。

調査方法

調査の対象とした資料は、各地の幼稚園の記念誌、都道府県及び区の教育史、都道府県の保育史、学校建築史、日本体育史、保育雑誌「京阪神連合保育会雑誌「幼児の教育」等である。

調査の結果

1560年のブリューゲルの「子供の遊戯」の絵には「ぶらさがり（横木に回転する）」の遊びをしている子どもが描かれている。当時市場で馬をつなぐ柵に、子ども達はぶら下がったり、上に乗ったり、回転して遊んでいた。子どもの遊戯としては、このようにかなり古くから鉄棒の原型のようなものが行われていた。

しかし鉄棒は、教育の中では体育として登場する。19世紀初頭のドイツでは、祖国防衛を担う新しい国民を形成することを目的とした「ドイツ体育」(1816)に示された運動内容に水平棒（鉄棒）が入っている。イギリスでも、ドイツ体育が普及していき（フェルカーの体操場1825に鉄棒を行っている絵がある）、初等学校へも体操が導入された。わが国でも明治4年（1871年）に慶応義塾内には鉄棒が備え付けられたようである。では小学校ではどの様に鉄棒が設置されていったのだろうか。明治3年に学制が公布され、小学校課程中に初めて教科としての体術（体操）が置かれたが、内容の指示はなかった。翌年の「改正小学教則」では具体的内容として「体操図」が指示されたが、鉄棒（木製）で遊んでいる様子が絵によって紹介されたにとどまった。明治19年の教育制度の改変により、小学校が国民教育として基本的に確立され、体操は普通体操、兵式体操の２本立ての教科となった。港区教育史によると港区の麻布小学校では、明治37年に運動場に平行棒、小鉄棒が設けられ、明治41年には月南山小学校、笄小学校にも鉄棒が設けられた。校舎の整備が一応終る明治40年頃から、校庭には様々な遊具や観察用教材が揃えられ、鉄棒もその一つとして設置されていったようである。大正2年には「学校体操教授要目」が制定され、わが国の学校体育における統一的な指導方針が提示された。体育内容は「体操、教練、遊戯、撃剣及柔術」で、教材の中に懸垂運動（鉄棒）が取り入れられた。「京都小学五十年誌」（大正7年）には、この要目を受けて体操機械器具の整備を行い、鉄棒、水平棒などを新設したと書かれている。また大正7年の京都府女子師範学校附属小学校の平面図にも鉄棒がある。小学校では、明治後期から休み時間の遊び道具として設置された鉄棒が、体育の内容に含まれて、広く普及していった。

では、鉄棒は幼稚園にはどのように入ってきたのだろうか。各地の幼稚園記念誌や県の保育史を調べてみると、徳島県幼稚園史には、鉄棒の記述はない。岡山市立深柢幼稚園百周年記念誌にも戦前には鉄棒の記述がない。土浦市立土浦幼稚園創立百周年記念誌にも大正時代にブランコ、滑り台はあるが鉄棒はない。長崎大学附属幼稚園にも大正時代にブランコの話はあるが、鉄棒はない。奈良県五条幼稚園の大正10年の平面図にも滑り台やシーソー、遊動円木はあるが、鉄棒はない。舞鶴幼稚園百年誌の明治・大正の部にもブランコ、滑り台の図はあるが、鉄棒はない。松本幼稚園百年誌にも、鉄棒の記述はない。京都教育大学教育学部附属幼稚園百年誌には、大正7年の移転前の思い出話の中に、鉄棒が出てくるが、移転当時の園庭の設備には鉄棒はない。岡山県倉敷小学校附設幼稚園の平面図（大正4年）にはブランコ、滑り台、固定円木とともに鉄棒がある。大阪教育大学附属幼稚園の百周年記念誌では、昭和2年に移転した園舎平面図に鉄棒がある。大阪府愛珠幼稚園の百年誌には、昭和15年、低鉄棒、雲梯を設置と記されている。昭和に入ってから鉄棒を設置した記録はいくつかみられるが、大正時代までは倉敷小学校附設幼稚園以外に鉄棒の記述はない。日本幼児保育史における大正時代の自由遊びの記述にも、ブランコ、室内シーソーはでてくるが、鉄棒についての記述はない。「京阪神連合保育会雑誌」や「幼児の教育」誌上にも、明治や大正時代に鉄棒の記述はほとんど見あたらなかった。

しかし明治41年の「婦人と子ども」（8巻11号）に和田実は、玩具について述べる中で、女高師附属幼稚園で近々腰掛付のブランコが設けられるそうだという話と共に、この他に釣る下がるための金棒や低い平行棒、固定円木なども至極よかろうと思う。作り方次第で決して危険はないもので、常に十分備え付けられる事を望むという旨を書いている。また大正5年の「婦人と子ども」（16巻10号）には女高師附属幼稚園参観記の記

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

事がある。それによると「真似ほどの機械体操やぶらんこのまわりには、男児が騒いでいる」「機械体操にくるまったいたずらっこ」というように、この当時、女高師附属幼稚園に鉄棒と思われるものがあったようである。また昭和14年の「幼児の教育」（39巻6号）には、「幼稚園の遊戯と体育」という題で、体育家と幼稚園関係者の座談会の記事がある。この中で体育家の「危険かどうかは判らないが、上体の発育を促進させる低鉄棒も或はよいかもしれない」という発言に対して、倉橋は「昔はここの幼稚園にもあったような気がする。その時も幼児の軟骨の事が問題になり、前腕のみで全身を支えたり、振ったりするのはどうだろうか？ということから止めになった。」という旨を述べている。この記事から上記の女高師幼稚園の大正5年の機械体操は鉄棒であり、その後取り除かれたものと思われる。

知識を与える保育から脱して幼稚園を変革しようという明治後半からの動向の中で、鉄棒が遊具として幼稚園の中に入り始めた兆しが見えるが、少なくとも大正時代には鉄棒は幼稚園の遊具としては一般的にはなかったものと考えられる。昭和に入って、少しづつ鉄棒を設置する園が出始め、昭和17年の「本邦保育施設に関する調査」によれば、低鉄棒を備えている幼稚園は13.6％であった。

「幼児の教育」誌上に鉄棒の記事が多くでてくるのは、健康教育や体力の増進が重視された戦時下、特に昭和17年頃からである。鹿児島女子師範附属幼稚園（42巻3号）、感応幼稚園（42巻11号）、千葉県女子師範学校附属幼稚園（43巻2号）、石川師範女子部附属幼稚園（43巻6号）などの低鉄棒の記事がある。44巻4号（昭和19年）では、文部省学徒動員課長が「戦時下の子供の体育」と題して幼稚園での体育の具体的指導は国民学校体錬科教授要項及その実施細目の精神とその内容を参考にしていただきたいと述べ、その要点の中に「懸垂」が挙げられ、国民として活動する基礎的能力だから着目して指導していただきたいと述べている。

戦後になっても、昭和23年の保育要領には鉄棒の記述はない。またフレーベル館七十年史の昭和24年度の保育用品目録にも鉄棒はない。また「幼稚園基準」（昭和27年）、「幼稚園設置基準」（昭和31年）には鉄棒の記述はない。このように戦後、急に鉄棒が普及したというわけではないようである。しかし「幼稚園教育要領」（昭和31年）の領域「健康」の望ましい経験２の「いろいろな運動や遊びをする」という部分にはすべり台・ぶらんこに次いで低鉄棒があげられ、また指導書にも鉄棒での活動が具体的に書かれている。昭和20年代後半からは、小学校との関連で幼稚園の教育課程が考えられるようになり、カリキュラムが盛んに研究され、「幼児の教育」誌上にもその動向が伺える。「低鉄棒では、何と何の動作が出来ていなくては、」というような体育カリキュラムへの批判があげられる（53巻2号）一方で、カリキュラム作成の基礎資料として体力測定が行われ「懸垂」があげられたり（53巻9号）、発達に応じた適切な指導を行うために、幼児の運動能力の発達の調査の記事があげられている（55巻2号、55巻8号）。また昭和32年の第5回全国幼稚園施設研究大会では「施設設備の管理」についての分科会で、懸垂力、走力、跳力が養われにくい現状を踏まえて、滑り台、ブランコ、砂遊び場、低鉄棒の設備の充実について話合いがなされている（56巻4号）。

昭和39年の文部省通達「幼稚園教育の振興について」では、幼稚園の設備についての中に低鉄棒の記述があり、昭和42年の「幼稚園設置計画の手びき」では、すべり台、ぶらんこ、砂遊び場に次いで低鉄棒、固定円木、太鼓橋を選択設置することが妥当であるとされている。これらの事から、鉄棒は昭和31年の幼稚園教育要領の前後から普及しはじめ、昭和30年代に全国的に普及していったようである。桐生（昭和44年）が東京近郊の5県の80園で遊具について調査した結果では、低鉄棒を設備している幼稚園は全体の90％であった。

考察

今回調べた幼稚園関係の資料の中で初めて鉄棒についての記述が見られたのは、明治41年に和田が遊具として鉄棒を備えることを提唱した記事であった。しかしそれを受けて作られた可能性のある女高師附属幼稚園の鉄棒は、大正時代になって、倉橋が主事の時代に撤去されたものと思われる。戸外や園外での保育が盛んになり、ブランコや砂場が急激に普及した大正時代に鉄棒が普及しなかったのは、なぜなのだろうか。それは、鉄棒が幼児にとって適しているのか否かを考慮したからではないのだろうか。幼児にとってどのような遊具が適しているのかという観点から遊具を選択し、また保育は鍛錬ではなく、園庭は校庭ではないという幼児教育者の考えがあったが故に、鉄棒は小学校からすぐに幼稚園へと普及しなかったのではないのだろうか。鉄棒は、戦時下における鍛錬や戦後における小学校体育との関連で幼稚園に入ってきたようである。そこでは幼児にとって鉄棒が適しているか否かを考えるというよりも、国民学校の鍛錬や小学校的な体育カリキュラムに合わせる形で入ってきたものと思われる。昭和14年の「幼児の教育」誌上での体育家と保育関係者の座談会の中で、「上体の発育に鉄棒が有効だ」という体育家の発言に対して、倉橋は「教練でするのではない」と反論し、両者の意見は歩み寄らなかった。また倉橋は「戦時保育の本義と実際」（幼児の教育43巻8・9号昭和18年）でも、体力錬成の名に於て方法を誤るとかえって害が起こると懸垂の問題を述べている。鉄棒イコール懸垂ではないが、鉄棒は本当に幼児にとって重要なものなのか、考え直す余地がありそうである。

NII-Electronic Library Service